



信念が、世の中を変えていく。「One's Way」でいこう。

iSM ×

コミュニケーション

帝京大学シミュレーション教育センターにて
撮影 / 戎谷康宏

患者中心という、 医療の理想を追求するために

人材に求める資質として、コミュニケーション力をあげる企業や組織は多い。解釈は伝達力や論理的思考力などさまざまだが、チームワークが成果を左右する業務ほど上位にランクする資質といえるだろう。

その最たる例に、人々の健康や命を守る医療がある。医師、看護師、薬剤師、救急救命士など、多くの職種でチームが構成され、一分一秒を争う危険な状況のなか、一糸乱れぬ連携が要求される。このような場で必須とされるコミュニケーション力は、どのように育成されるのだろうか。現場で失敗しながら場数を踏むというわけにはいかないだけに、大学教育が担う部分は非常に大きい。

帝京大学では、医療における多職種連携をテーマとした新たなチーム医療教育が行われている。医学部、薬学部、医療技術学部看護学科および救急救命士コースの4年生全員が参加する、医療系学部横断型演習授業「医療コミュニケーション」である。総勢600人におよぶ学生を、数名ごとの混成チームに編成。実際に多職種間コミュニケーションをグループワークのなかで行い、チーム医療に必要な知識・態度・行動を学んでいく。板橋キャンパス（東京都板橋区）に医療系学部が集結しているからこそ実現できるカリキュラムである。参加した学生に感想を尋ねてみた。

「職種によって患者を診る視点や医療用語にも違いがあるなど、発見が多い授業でした。互いの専門分野を理解しないとチーム医療は円滑に行えない。そう気づきました」（川崎輝帆さん・医療技術学部看護学科4年）

学生が取り組む検討事例も、肺炎による呼吸不全で救急搬送された女性のケースなど、極めてリアルであり緊張感が漂う。臨床上の情報を提供しているのが、キャンパスに隣接する医学部附属病院と聞いて納得した。そして、学生の習熟度を高める鍵となつて

いるのが、授業の最後に行われる模擬カンファレンス。病院の医療チームが、同じ検討事例で多職種間コミュニケーションを実演するプログラムである。自ら取り組んだ後にプロの手本を見て振り返りができるため、参加した学生の評価も総じて高い。

「全職種が揃って行われるカンファレンスを、学生のうちに参観できたことは大きな収穫になりました。コミュニケーションといっても、情報交換はできて当たり前。本質は相手を理解することであり、それがチームに生まれる力を大きくすると実感しました」（越後谷雅一さん・医学部4年）

この授業の根底には、医療のあるべき姿を追求するISM（イズム）が流れている。それは、『患者中心の医療』。患者の目線に立てば、新人もベテランも同じ医療者である。学生を現場へ送り出す前に、コミュニケーション力という資質を、実践力へと開花させなければならぬ。そんな大学の責任感が教育を進化させている。



左：医療系3学部の混成チームによるグループワークでは、検討事例をもとに多職種間コミュニケーションを通じて患者の状況を把握。解決する方向を見出す。



右：大講堂で行われた模擬カンファレンス。さまざまな職種からなる病院に勤務する医療チームが同じ検討事例で実演し、質疑応答が行われる。2日間で約600人の学生が聴講した。

帝京大学
TEIKYO

本部広報課 TEL.03-3964-4162
〒173-8605 東京都板橋区加賀2-11-1 <http://www.teikyo-u.ac.jp/>